



Title	語種と複合語 : 意味論的観点から
Author(s)	今井, 忍
Citation	日本語・日本文化. 2013, 40, p. 65-77
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50775
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈研究ノート〉

語種と複合語¹⁾

——意味論的観点から——

今井 忍

1. はじめに

一般に、日本語には以下の4つの語種があるとされる（擬声語・擬態語を除く3種とされることもある）。

- (1) a. 和語：「くるま車、ひかり光、あたま頭、やま山」など
- b. 漢語：「言語、勉強、自転車、証明」など
- c. 擬声語・擬態語：「ぺらぺら、ごつごつ、どんより、ぼったり」など
- d. 外来語：「コンピューター、カード、デスク、フォーク」など

後述のように、従来の研究では、語種は主に音韻的観点からと形態的観点から特徴づけられてきた。これらの観点から見た場合、これらの語種は語源とほぼ完全に対応しており、逆に言えば、分析の主眼は、いかに語源と音韻的・形態的性質が一致しているか、また、どのような場合に一致していないのかといった点に集中してきたように思われる。

しかし、やや異なる観点から見た場合、これらの語種分類はやや大雑把すぎるように思われる。特に、以下で見るように、和語の中に2つのカテゴリー、すなわち和語単純語と和語複合語があり、和語複合語は漢語（ないし外来語）と共通した性質を持つことが等閑視されている。

本稿では、意味論的観点から語種を捉え直し、それによって和語複合語と漢語との共通性が適切に説明できることを示し、それに基づいて今後の分析の方向性について考察してみたい。

2. 従来の研究

本節では、語種に関する従来の研究について簡単に見ておく。音韻論的観点と形態論的観点からの研究に分けて紹介する。

2.1 音韻的観点からの特徴づけ

Itô and Mester (1995) では、適用される音韻規則や音韻的制約が語種によって異なるとされる。

I. 和語にのみ適用されるもの

(2) 連濁：合成語の後項要素の語頭が有声化する

- a. 和語：「なべ」+「ふた」→「なべぶた」、「まゆ」+「け」→「まゆげ」
- b. 漢語：「自動」+「処理」→「*じどうじょり」、
「利用」+「価値」→「*りようがち」

- c. 外来語：「ホット」+「コーヒー」→「*ホットゴーヒー」、
「シルク」+「ハット」→「*シルクバット」

(3) ライマンの法則：一つの形態素の中には濁音が一つしか許されない

- a. 和語：「蓋（ふた）」「札（ふだ）」「豚（ぶた）」「*ぶだ」
- b. 擬声語・擬態語：「ごとごと」「どたばた」
- c. 外来語：「バグ」「ガイド」「ベッド」

II. 和語と漢語にのみ適用されるもの

(4) 単一 [p] 制約：[p] の連続（あるいは撥音との連続）のみが許容される

- a. 和語：「河童（かっぱ）」vs.「*かぱ」、「すっぱい」vs.「*すぱい」
- b. 漢語：「立派（りっぱ）」vs.「*りぱ」、「乾杯（かんぱい）」vs.「*かぱい」
- c. 擬声語・擬態語：「びかびか」「ばたばた」「ぽりぽり」
- d. 外来語：「ペーパー」「ポイント」「スーパー」

III. 和語と擬声語・擬態語にのみ適用されるもの

(5) 鼻音群有声化制約：*[mp]、*[nt]、*[ŋk] という連続が許されない

- a. 和語：「蜻蛉（とんぼ）」vs.「*とんぽ」、「噛んで」vs.「*噛んで」
- b. 漢語：「散歩（さんぽ）」「反対（はんたい）」「参加（さんか）」
- c. 擬声語・擬態語：「しょんぼり」vs.「*しょんぼり」、

「こんがり」vs.「*こんかり」

d. 外来語：「バンパー」「コント」「モンキー」

IV. 和語、漢語、擬声語・擬態語に適用されるもの

(6) 濁音連続制約：*[bb]、*[dd]、*[gg]、*[zz] という連続が許されない

a. 和語：「買って」vs.「*買って」、「あさって」vs.「*あさって」

b. 漢語：「失敗（しっぱい）」vs.「*しっぱい」、

「沸騰（ふっとう）」vs.「*ふっとう」

c. 擬声語・擬態語：「にっこり」vs.「*にっこり」、

「たっぶり」vs.「*たっぶり」

d. 外来語：「ウエップ」「ベッド」「バッグ」

これらの条件は、一部の例外はあるものの語種に関する傾向をほぼ正確に捉えていると言える。

2.2 形態的観点からの特徴づけ

形態的観点からみた場合、合成語に現れる要素は原則として同一語種でなければならない、という制約があるとされる。このことは、「大（おお／だい）～」「～車（しゃ／ぐるま）」「～人（にん・じん／ひと）」といった、同じ漢字が2種類の語種にわたって使用される接辞においてははっきりと見ることができる。

(7) a. 「だいしんさい（大震災）」vs. 「*おおしんさい（大震災）」(cf. 「大男」^{おおおとこ})

b. 「じどうしゃ（自動車）」vs. 「*じどうぐるま（自動車）」(cf. 「風車」^{かざぐるま})

c. 「たびびと（旅人）」vs. 「*りょこうびと（旅行人）」

(cf. 「管理人」^{かんにりにん}「社会人」^{しゃかいじん})

ただし、この原則には例外も多い。

(8) a. 「だいじしん（大地震）」vs. 「おおじしん（大地震）」（和語＋漢語）

b. 「ふかくじつ（不確実）」vs. 「ふたしか（不確か）」（漢語＋和語）

c. 「ボイ捨て」「がぶ飲み」「ぶら下がる」（擬声語・擬態語＋和語）

d. 「IT化」「フランス風」「カントリー調」「クーポン券」（外来語＋漢語）

e. 「勉強机」「ベニヤ板」「フランス窓」（漢語／外来語＋和語）

音韻的制約に比べると例外が多いものの、大まかな傾向としては成り立っており、

形態的制約も日本語における語種の存在を確証していると言えるだろう。

3. 語種に関する新たな問題

ここまで見てきたように、従来の研究では、日本語に語種という概念を想定することでいくつかの音韻的・形態的な制約を簡潔に説明できることが示されている。そこでは、語源と語種が（少数の例外はあるものの）一対一に対応しており、語源が分かれば語種は完全に予測可能であることが前提となっている。

しかし、そのような対応は、以下のような現象においては必ずしも当てはまらない。

3.1 「～中」の特性

Lee-Goldman (2004) は、ある動作が進行している過程であることを表す「～中」の特性として、以下の4点を挙げている。

- (9) a. 原則として漢語と結びつきやすい:「食事中」「実施中」「電話中」「工事中」
- b. 和語複合語とも結びつきやすい:「読み込み中」「取り締まり中」「店じまい中」
- c. 外来語とも結びつきやすい:「デモ中」「エンジョイ中」「スト中」「デート中」
- d. 和語でも4モーラ以上のものは容認度が上がる:「考え中」「扱い中」「施し中」
- e. 単一形態素からなる3モーラ以下の和語では容認度が低い:「*読み中」「*書き中」

本来「～中」は漢語であるため、形態的な制約により漢語と結びつきやすいのは当然であるが、注目すべきは「～中」が和語複合語と結びつきやすい点である。これは、上記のような語源と語種の一対一対応によってはうまく捉えることができない。

3.2 英語の句動詞と日本語の複合動詞の対応

Moehle (2010) は、英語の句動詞（動詞＋小辞）が、翻訳において以下の日

本語の形式と対応することが多いことを指摘している。

(10) a. 複合動詞: float down - 舞い降りる、crawl out - 這い出る

b. 擬音語・擬声語+動詞: crash down - ドスンと倒れる、
plod along - とぼとぼ歩く

c. 漢語動詞: come out - 出版される／公開される

ここでも注目すべきは、英語の句動詞の翻訳として和語複合動詞と漢語動詞があるという点である。和語複合動詞は和語と和語との複合であるため、語源的には純粋な和語である。したがって、ここでも和語複合語と漢語という2つの異なる語種が英語の特定の構文に対応していることになる。

3.3 漢語と和語複合語はなぜ同じに扱われるのか？

上の観察から、漢語と和語複合語は何らかの現象において「同じグループ」として扱われることが分かる。では、なぜこれらは同じグループなのだろうか。以下では、歴史的観点と意味的観点からこれらの共通性を考えてみたい。

また、従来、句と複合語の違いとしてしばしば挙げられる意味の透明性の問題についても、新しい観点から再考してみたい。複合語は意味が合成的でない、すなわち個々の要素の意味を足し合わせた以上の意味を表すと言われてきたが、そのような個々の要素の意味を「組み上げる」という記述方法は順序が逆転しており、むしろ意味（概念）の方が先にあり、それに対する名づけとして複合という方法が使われる、と考えるべきであることを示す。

4. 複合動詞と漢語との歴史的な関係

藤井（1990）は、複合動詞が漢文訓読から生じたことを示唆している。

夙に、竹内美智子氏は源氏物語の複合動詞に、接頭辞的動詞+実質動詞や、実質動詞+補助動詞の形式のみならず、実質動詞+実質動詞の形式が多数用いられていることを指摘し、これらが漢文・漢語を前提とする語彙であることを述べられた。また、秋本守英氏は、平安時代の和文七作品の複合動詞について、時代の下がる方が、また、漢文訓読文の影響の強いと言われるもの

より和文的であると言われるものの方が、複合動詞が多く、文が長くなる傾向があるとともに、その中に見える併列的複合動詞（竹内氏の実質動詞+実質動詞に相当するもの）が漢文的なものであることを指摘しておられる。

（藤井 1990: 27、下線部引用者）

もし複合動詞が漢文を起源とするとしたら、それらが漢語と同一のカテゴリーとして扱われるのには一定の理由があると考えられることができるだろう。ただし、ここでは並列型の複合動詞のみが問題とされており、複合動詞の全てが漢文由来であると述べられているわけではない。今後の検討が必要となる。

5. 意味的観点から見た複合語

意味的観点から見た複合語の特徴は、それが「名づけ機能」を持っているということである。阪倉（1978）は、その機能について以下のように述べている。

固有名（詞）は、その形が、他のどの名とも違っていることを理想とする。いまだかつて一度も用いられたことのない音の組み合わせを考えて、たとえば「ンラパゴッ」というような変わった名を子どもにつければ、その固有名（詞）としてのはたらきは、最もよく果たされるわけである。

名というのは、つまりは、一つの記号であればよいのだから、本来から言うところ、そういう試みも可能なはずである。しかし、実際は、人名にしる商品名にしる、そんなとびな名は避けて、すでに存在することばや文字（を組み合わせたもの）が利用される。（阪倉 1978: 7-8、下線部引用者）

また、影山（1993）も複合動詞の名づけ機能について言及している。

「春に吹く風」は統語的な修飾関係で成り立ち、その意味は全く透明で合成的である。すなわち、春という季節に吹く風ならどのようなものでも指すことができる。これに対して、「春風」は単に「春に吹く風」を指すのではなく、春に吹く風の中でも我々が典型的に思い浮かべる暖かく快適な風を意

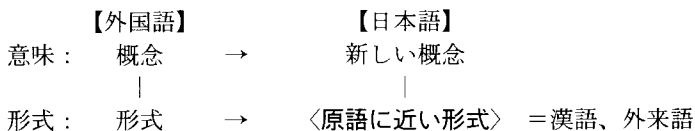
味すると思われる。言い換えると、「春風」という複合語はそのような（かなり漠然とはしているけれど）特定の性質を持った風に対する呼び名である。この名づけ機能（naming function）は程度の差こそあれ、語彙部門で作られる名詞には共通してみられる。（影山 1993: 8）

このことは、従来よく指摘されてきたが、この特性に基づいて分析を発展させた研究は管見では存在しない。しかし、後述のように、和語複合動詞（ひいては和語複合語全体）が漢文訓読に由来することと複合語に名づけ機能があることを合わせて考えると、漢語と和語複合語がなぜ類似したものとして扱われるかという問題に一定の答えを与えることができる。

6. 意味的観点から見た漢語の受容と複合語

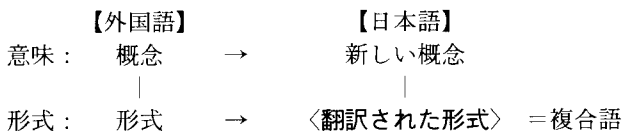
意味的に考えると、漢語の受容はそれまでの日本語にはなかった新しい概念への名づけを意味する。すなわち、阪倉（1978）に基づけば、新しい概念に対して新しい形式を対応づけるということになる。その新しい形式は、原語の形式に近いものである。

(11)



一方で、いわゆる翻訳借用という方法をとることもあり得る。この場合に使われるのが複合という方法である。

(12)



このように考えると、漢語と和語複合語の共通点が明らかになる。すなわち、漢語も複合語も新しい概念に対する名づけという点で共通していると考えることができるのである。

7. 句と複合語

このように考えていくと、従来指摘されてきた句と複合語の違いについても、まったく違った見方ができる。従来は、統語的に作られる句は意味が透明であるのに対し、複合語はその構成要素の意味の総和が全体の意味にならないため意味が不透明であるとされてきた（影山 1993、齋藤 1992、今井 1998）。以下の (13) では、a が句による表現で b が複合による表現である。形式的にはほとんど同じであるが、表される意味は異なる。(13) a では、山に登るための目的は何でもよいが、(13) b ではその目的が娯楽に限られているのである。すなわち、「山登り」という複合語は「娯楽のため」という意味を含んでいるが、そのような意味は構成要素である「山」や「登る」の意味からは予測されない。

(13) a. 山に登る ← 目的は何でもよい（娯楽、遭難者救出、荷物運搬、など）

b. 山登りをする ← 目的は娯楽に限られる

このことから、複合語の意味に関する問題は、個々の要素から予測できない意味をどのように「付け加える」かであると捉えられがちであった。しかし、これまでの議論から分かるように、複合は個々の要素の意味がまずあって、それが組み合わせあって全体の意味（+特異的な意味）を形成するというものではなく、まず意味（＝新しい概念）があって、それに対して複数の言語形式を組み合わせで「名づける」プロセスである。このことは分析の方法の根本的な見直しを迫る。

(14) 従来の考え方：形式 A + 形式 B → [合成] → 意味 A + 意味 B + α

新しい考え方：形式 A + 形式 B ← [名づけ] ← 意味 N

8. なぜ名づけが必要なのか？

そもそも、なぜ複合語を使って新しい概念を名づけなければならないのだろうか。統語的な規則を使えば、ほぼ無限と言っていい意味を言語は表すことができる。実際、我々は日々出会う新しい状況を、様々な文や句を統語的に作り出すことで表現している。新しい概念が外国から移入されたとしても、それは統語的な規則によって生成される句によって十分表現できるはずである。それなのに、なぜわざわざ複合という手法を使ってその概念に対して名づけを行わなければならないのだろうか。

これに対しては、認知言語学的な観点からの説明が有効である。Lakoff (1987) も述べるように、われわれは、日常的に繰り返し経験する事柄に対してスキーマを形成する。スキーマを形成することによって、その経験に関する情報は扱いやすくなる(記憶・想起・伝達が容易になる)。

もし、ある言語共同体で新しい概念が作り出され、それに繰り返し言及する必要がある場合、その概念をスキーマ化して形式的なラベルをつけた方が、情報として扱いやすくなる。その際のラベルとして機能するのが複合語と漢語であると考えることができる。

9. 複合語分析の新しい方向性

和語複合語と漢語との共通性を新しい概念に対する名づけであると考え、いくつかの新しい研究の方向性が見えてくる。

9.1 新しい概念分類

Lee-Goldman (2004) では、「～中」の使用に語種の問題が関わっていることが示されていた。それは、(大まかに言えば) 漢語・複合語・外来語と「～中」は共起するが、和語単純語とは共起しないという制約である。このことと、前述のような複合語・漢語の性質を合わせて考えると、一般に語(形態素)の表す概念にはレベルの違いがあるのではないかと推測される。つまり、漢語・複合語・外来語の表す概念と和語単純語の表す概念は異なるレベルに属するのではないかということである。

ここでは、それを仮に「単純概念」と「複雑概念」と呼ぶことにする。和語単純語が単純概念を表すのに対して、漢語・複合語・外来語は複雑概念を表す。「～中」は複雑概念を表す要素としか共起しないと考えれば、簡潔な説明が可能になる。

9.2 日本語以外の言語への応用

ここで提案したモデルは、日本語だけではなく他の言語にも応用可能である。例えば、よく知られているように、英語においても日本語の語種と類似した語彙

の種類分けがある。それは、ゲルマン系の語彙とラテン系の語彙の違いと呼ばれている。英語の本来語であるゲルマン系の語彙が日本語の和語にあたり、外来語であるラテン系の語彙が日本語の漢語にあたる。これらには、日本語と同様に音韻的・形態的・統語的な区別がある（岡田伸夫『A Little Grammar Goes a Long Way』より）。

- (15) a. ゲルマン系：単音節（go, hit, sing）vs. ラテン系：多音節（reduce, arrive, demand）
- b. 語種によって接辞が決まっている：
 - ゲルマン系：un-, -hood vs. ラテン系 in-, -ity
- c. 比較級・最上級：ゲルマン系：-er, -est vs. ラテン系：more ～, most ～
- d. ゲルマン系：句動詞を作る（shake up, break up）vs. ラテン系：
 - 句動詞を作らない（*vibrate up, *destroy up）
- e. ゲルマン系：dative shift が可能 vs. ラテン系：dative shift 不可

このように、基層語（substratum）と上層語（superstratum）を持つ言語は数多い。しかし、それらの言語の間での基層語と上層語の関係の共通性に着目した研究はこれまであまりなかった。これは、それぞれの言語における形式的（音韻的、形態的、統語的）特徴のみに着目していたためであり、意味的な要因に着目することで、それらの共通性を捉えることが可能になるかもしれない。

9.3 Construction Grammar による分析の可能性

部分の意味から全体の意味が構成できないのは、複合語だけではない。むしろ、意味の不透明性を示す現象としてよく知られているのは慣用句（idiom）である。例えば、「顔が広い」という慣用句は、「顔」と「広い」という個々の単語の意味を知っていても、全体の意味である「知り合いが多い」という意味を得ることはできない。

慣用句を理論的に一貫性のある方法で扱うことのできる枠組みとしては Construction Grammar がある。Construction Grammar は、大小様々なあらゆる言語単位を construction として統一的に扱う理論である。そこでは、それぞれの construction に対して音韻的・統語的・意味的・語用論的な情報を付与し、その con-

struction 間にどのような関係があるかを考察する。

この理論は、これまで述べてきた特定の意味に対する名づけとしての複合語という観点との親和性が高いと思われる。なぜなら、そこでは、個々の単位の合成としての複合語という観点ではなく、全体の意味をまず規定してそれに対して複合語という形式を対応づけるという方法を可能にするからである。

10. おわりに

本研究で述べたことは、まだ単なる思弁であり、データによる十分な裏付けは得られていない。また、理論的にも未整備な部分が多い。特に、「単純概念」と「複雑概念」については、これまでの研究にも類似した概念は存在しないように思われるが、近年、語彙の概念構造に関する研究は様々な分野で長足の進歩を見せており、先行研究を精査して裏付けを行うようにしたい。

また、Construction Grammar による分析は言語教育との親和性も高いように思われる。近年、日本語教育における複合動詞の研究が増加しつつあるが、ここでも従来のような前項要素の意味と後項要素の意味からどのようにして全体の意味を得るかということを発想の原点とした研究がほとんどである。しかし、複合動詞の運用には、その意味論的な特徴を知るだけでは十分ではなく、格体制などの統語的性質や使われる文体や文脈などの語用論的情報も不可欠である。したがって、個々の要素から全体の意味を得るという方向性だけではなく、複合動詞全体の音韻論的・統語論的・意味論的・語用論的な情報をまず確定し、それに対する形式的な対応付けを行い、類似した形式（特に共通の後項を持つ形式）に拡張していくという方向性も極めて重要である。Construction Grammar はそのような分析に対する基盤を与えてくれることが期待される。

注

- 1) 本研究は、第31回北大阪言語フォーラム（2012年11月18日、於みのお市民活動センター）における研究発表「意味的観点から見た日本語の語種」に基づいている。会の席上、有益なコメントいただいた参加者に感謝の意を表したい。

参考文献

- 今井 忍（1998）「『句の包摂』に関する意味論的考察」『日本語・日本文化』第 24 号. .
- 影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房.
- 斎藤倫明（1992）『現代日本語の語構成論的研究』ひつじ書房.
- 阪倉篤義（1978）『日本語の語源』講談社現代新書.
- 藤井俊博（1990）「今昔物語集の語彙形成―複合動詞の構成を通して」『同志社国文学』第 33 号.
- Itô, J. and A. Mester (1995) “Japanese Phonology.” In J. Goldsmith (ed.) *The Handbook of Phonological Theory*. Blackwell.
- Lakoff (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things*. The University of Chicago Press.
- Lee-Goldman, R. (2004) 「『*? 広がり中』―日本語の語種と品詞におけるカテゴリー拡張―」『日本語・日本文化研修留学生修了論文集』第 6 号. 大阪外国語大学留学生日本語教育センター.
- Moehle, A. (2010) “Semantic Extensions of English Phrasal Verbs and Japanese Lexical Compound Verbs: From Motion to Change-of-State.” 大阪大学大学院言語文化研究科修士論文.

[参照した Web サイト]

- 岡田伸夫『A Little Grammar Goes a Long Way』: <http://www.biseisha.co.jp/lab/lab2/25.html>,
<http://www.biseisha.co.jp/lab/lab2/26.html> (いずれも、2012 年 12 月 20 日にアクセス)

〈キーワード〉語種、複合語、名づけ機能、借用、Construction Grammar

On the Similarities of *Kango* (Chinese loanword) and Compound

—A Semantic Perspective—

Shinobu IMAI

In this paper, we deal with some similarities between *kango* (loanwords from Chinese) and compounds consisted of Japanese native words and consider a new direction of research based on those similarities. Unlike previous researches which focus on the phonological aspects of word classes, we note two points on Japanese word classes: historical origin of some native compounds and naming function which characterizes both *kango* and native compounds. On the basis of these observations, we suggest that the Construction Grammar approach will be suitable for this problem.